

【1】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

その一

私はふたつのさびしい虫のいのちと交感を持った。

信濃路に夏の訪れのあわただしい日、私は先生の山荘の庭に先生とならんで季節の会話のひまにその虫の声を聞いたのである。春蟬と言った。七月なかば、五日か七日をかぎって、林のなかに啼いて、あとは行方も知らない。その日々の高原の空にはほととぎす、やぶうぐいす、<sup>㉔</sup>閑古鳥などの唄がひびいていた。そのなかに、春蟬は彼のかなしい感傷の小曲をうたいあげたのである。

夏のあいだ、私は忘れるとなしに彼のことを忘れていた。幾たびも物がなしい夕ぐれに出会い、そのようなおりに私は彼のことを思い出さねばならなかった筈である。しかし私はすっかり忘れ果てていた。

やがて夏も逝き、秋も定まった一日、私はふたたび先生の庭に客となった。そのとき先生は虫籠を示され、その虫を草ひばりと教えられ、その姿に「<sup>A</sup>仄か」という言葉で註せられることを怠られなかった。座には高名な抒情の小説をものである人が居あわせ、先生のその紹介も実はその小説家に向いてであったのだが、私はそれを盗んだ。夜に入って、それがその年の夏のおわりの一夜となったのだが、私は先生の書齋じゅうにせいっぱいの魂を傾けつくしてうたい上げる草ひばりの唄を聞いた。私のもっとも<sup>B</sup>潤沢のこの一刻に、私は、忘れていた春蟬のことを思い出し、この虫とあれと考え比べた。比べずともよい啼き声だったのである。草ひばりの声は、純粹な白金で造られた精巧な楽器を稚拙な幼童がもてあそんでいるような、ぎりぎりのイロニイであった。これをイロニイと聞いたのは私の<sup>C</sup>歪みであったとおもうゆえ、私はそのことにひとつも触れず、そっと耳ばかりで彼の透明なうたい口を噛みしめていたのである。

次の朝、草ひばりは籠を逃れ去った。私はこの叛いた虫を叢に追う<sup>D</sup>愚行を<sup>E</sup>敢てした。私だけのみれんである。叢では、昨夜の<sup>F</sup>冴えと張りを忘れた虫らが、しらべのみはおなじ唄を繰り返かしていた。私は<sup>G</sup>索然とした<sup>G</sup>嫌悪を覚えた。しかし手は徒らに草の葉の向うをさぐりつづけた。

夏のはじめと夏のおわりと――。

私はこの虫らのいのちに交感を持った記憶をきょう忘れつくすことをねがっている。

その二

私はひとつの花を<sup>H</sup>誹謗しよう。

信濃路の村でその花を私は田中一三にたいへんたのしく教えた。淡いかなしい黄の花びらを五つ、山百合のように、しかしあのよう  
に力強くなく寧ろ<sup>H</sup>諦めきつたすがすがしさで、夕ぐれ近い高原の叢に、夏のはじめから夏のなかばまで日ごとのつとめとしてひらく花である。ゆうすげという名を或るひとから習った。そのあと植物学ぶ人から萱草、わすれぐさ、きすげと習い、また時経てその花びらを食用にすることまでも習った。私は習いおぼえたかぎりを田中一三に教えた。

きょう私は最初にその花を教えてくれたひとに向って<sup>I</sup>愚痴を繰返すことを情ない慰さめとして持っている。この誹謗もまたその輪のほかを出られない。恥を知るまえに、ただ私はさびしい。私はいまもあんなにありありと心に帰るあの高原のイメージのために頬

を濡らした。

夏の逝くころ、私はゆえもなく紀の国の外側の<sup>J</sup>輪廓を海岸や浪の上を辿りいちばん慌しくめぐった。信濃路ではすでにそのころ秋雨のようなものが降っていたのに、私のめぐった線は明るく白じらしく晴れていた。<sup>G</sup>帰るさ、私は伊良湖岬に杉浦明平を訪ねた。すると、杉浦明平が僕にゆうすげの花を岩かげに教えるような運命になつていた。信濃路を別れて十日あまり、明るい海光に曝されつづけた私の眼に、おなじ名の花とおもえない、みすばらしいみじめな花の姿が強いられた。<sup>H</sup>田中一三に私が教えたようには杉浦明平が私に教えるわけはなかった。その花は橙色に近い黄の花びらを一枚一枚ずうずうしい位に厚ぼったくふくらませ、一茎に幾花もむらがつていた。

私の持つふたつのゆうすげの絵は一体どうなることだろうか。互にあらがうであろう。そして、どちらかは跡方なく消えるであろう。

(立原道造『夏秋表』)

【1】

問一. 傍線部A～Jの漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二. 傍線部②の鳴き声をカタカナで表現しなさい。

問三. 傍線部③の「索然」の意味として、適当と思われるものを次の中から選り記号で答えなさい。

- ア. 心ひかれるものがなくて興ざめするさま
- イ. 非常に驚くさま
- ウ. 物事の出現・消失が急なさま

問四. 傍線部④の「誹謗」の意味を簡単に書きなさい。

問五. 傍線部⑤の「帰るさ」を別な表現にしなさい。

問六. 傍線部⑥は、どのように教えたのか本文中より一〇文字程度で抜き出しなさい。

【2】次のカタカナの部分の漢字で答えなさい。

- ① シツソで<sup>㉔</sup>セイケツな服そうは、  
③ カビな<sup>㉔</sup>イショウに<sup>㉔</sup>マサる

【3】次の語の反対語を書きなさい

- ① 近海    ② 歓喜    ③ 警戒    ④ 販売    ⑤ 巨大

【4】例にならって、①～④の意味になるように、「腰」を使った慣用句を書きなさい。

- 例 実行にうつる    Ⅱ 腰を上げる
- ① 他人に対して謙虚である

- ② びっくりする
- ③ 意気込みが途中で弱まり続けられなくなる

- ④ 本気になる
- ⑤ 無精で、なかなか行動に移さない

【5】次の作品の著者を解答群から選り記号で答えなさい。

- ① 舞姫    ② こころ    ③ たけくらべ
- ④ 泥の河    ⑤ 河童
- ア. 芥川龍之介    イ. 夏目漱石    ウ. 樋口一葉
- エ. 宮本輝    オ. 森鷗外

【6】次の語の中で秋の季語を5つ選りなさい。

- あやめ    茄子    金魚    栗    狐    初霜    コスモス
- 天の川    藤    梅    すすき    毛虫    木の葉
- 鈴虫    蜃気楼